

夫婦で漁村蒲入の住人となって



夫婦で漁村蒲入の住人となって

蒲入漁業協同組合 菱田 誠・江里子
(平成11年度京都府青壮年・女性漁業者交流大会発表)

1 地域の概況

私たちの住んでいる所は、京都府の北の端、経ヶ岬近くにある伊根町蒲入という所です。蒲入地区には66世帯122名が住んでおり、漁協組合員数63名で、ほとんどの家が漁業と関わりを持っています。

また、伊根町は人口約3,300人、1,079世帯の小さな町で、産業別人口としては、ちりめんを織る機業などの製造業、農業、漁業、サービス業が多く、1次産業、2次産業、3次産業に携る人の割合がほぼ同じ割合になっています。多人数の従業員を抱える企業は1つありませんし、高等学校の分校があるだけで、病院や大きな店舗も有りませんので、通勤、通学、通院や買物などのために約40km離れた宮津市まで出かけて行く人もあります。



図1 伊根町と蒲入地区の位置

2 漁業の概況

蒲入では、2ヶ統の大型定置網が漁協の自営事業として経営され、13名が従業員として働いているほか、20数名がイカ釣り、一本釣り、延縄などを操業し、また約20名程度がアワビ、サザエ、ワカメなどを獲る水視漁業を行っています。

水揚では、漁協自営の大型定置網が1億円前後、組合員のイカ釣りが4千万円、釣・延縄が4千万円で、地域全体の水揚金額としては2億円を少し上回るということです。また、漁協では、近年は加工にも力を入れており、売上げ金額5千万円達成を目指して、加工に携わる婦人の方を中心に頑張っておられます。

3 私達の移住の動機

私達は京都市内で勤めていましたが、営業時間の長い職場でした。2人とも毎日夜遅くまで勤務し、特に夫(私)の方は、会社が大きくなり、職場での地位が上がるに連れて、日付が変わってから帰宅することが当たり前ようになっていましたので、自宅でゆっくり語り合う時間もなかなか取れないような状況でした。

そんなある時、人事担当も兼ねていた夫の職場に、とある会社が見本に置いていった求人情報誌に「あなたも漁師になりませんか？」というフレーズのキャッチコピーが掲載されていました。それは、ありふれた求人広告の中でとても新鮮で、心に響くものがありました。漁師という職業は、その地区の人が代々やっているものだと思っていましたので、このような求人があるとは思っていなかったのです。その広告に心惹かれた夫は、それを自宅に持ち帰り、「こんなんやったらあかんやろか？」と冗談半分で、でも半分本気で話しかけました。同じ会社で、アルバイトとして働いており、夫の仕事に対する思いを解っていたのか、妻は「いいんじゃない」という、実にあっさりとした答えでした。後で妻に聞いてみたところ、冗談かとも思ったけれど、全く抵抗なく受け止められた、漠然と海の近くに住みたいと思っていたし、何となく「漁師」というものがカッコよく思えたので賛成したとのことでした。

その後、知人から面白い店があるから行って見たらと進められて行った店が、蒲入漁協の組合長の息子さんのお店であったことから、いろいろ話を聞いて、「やれるんじゃないか、やってみたい。」と考えて蒲入漁協まで話を聞きに行ったのが漁師になるきっかけとなりました。

< 蒲入への移住の経過 >

机の上の求人情報誌（他県のもの）（偶然）

～あなたも漁師になりませんか～



（妻の支持）



蒲入漁協組合長の息子さんの店（偶然）



蒲入漁協での話



（家族の支持）



借家の契約



蒲入への移住（平成10年2月）

（夫：35歳、妻：29歳）

4 移住後の生活の状況

移住前に家を買っていたのですが、こちらに来るに当たり処分して、今は蒲入で空き家を借りています。見晴らしが抜群で、妻も気に入っているようです。

夫の方は定置網の従業員ということで、夏、集合が一番早い時は午前4時30分集合です。毎晩9時頃には眠ってしまい、以前からすれば考えられないようなサイクルですが、直ぐに慣れました。

朝、漁から帰ってきて、朝食を取りに一度家に帰ります。だるくて朝食など喉を通らなかつた都会暮らしの時と比べると、御飯のおいしさは格別で、1日しっかり3食食べます。やはり、何といっても魚はおいしいです。





しかし、仕事の方は、海の上での真剣勝負、大変です。幸い船酔いはないものの、なにしろ漁業については何にも知らないのです。誰も悠長に教えながらやってくれる人は居ません。船で使う道具の名前も解らない中で、「マコトそこを }トツタリ~ でくれ！」・・・ }トツタリ?~ 何だかサツパリ解らないのでボサーとしていると、「何しとるだいやあ！ 早う括らんかいや！」と雷声で怒鳴られる。また、「 }ハッカー~ でそこを引っかけれ！」・・・引っかける意味は解っても }ハッカー~ が解らずウロウロ・・・また大声が出る。1日で今までの1年分くらい怒鳴られ1年が経過しました。

これだけでなく、海の上での作業に使う言葉は想像以上に理解できないことが沢山あり、漁師の方言と漁具の解らないのには苦労しました。

妻の方は、漁協の加工場で働かせてもらっていましたが、7時30分頃に出勤して夕方5時頃まで働くというパターンでしたが、平成10年2月に移住してからほぼ1年になろうかという時に子供が出来、お腹も大きくなって、今は休みをもらい、毎日ゆっくりと散歩をしたりして過ごしています。ただ、加工場が忙しい時など、たまに呼んでもらっています。



図4 加工場で働かせてもらっていた時の妻
(左から3人目)

地区の祭りや運動会、駅伝などには積極的に参加しています。妻は31歳、夫は37歳になりますが、(夫の場合ですと15年前に)学校を卒業して以来思いっきり走る事など全くなかったのが、京都に居る時は体力不足など感じたこともなく、逆に体力は有る方だったのですが、こちらでは付いていけません。そのほか、妻の方は、漁協婦人部活動で声を掛けてもらって、参加できるものは参加させてもらっています。



後列右から2人目が妻

あまり色々考えずに来ましたので、地区の人に「蒲入の区民となったら、漁協の組合員に加入する方がよからうで。」と言われ、少し戸惑うこともあります、いずれは入らせてもらいたいと2人で話しています。



図5 蒲入地区のイベントで地元の青年と記念撮影

5 波及効果

私達は地元の漁業のことはほとんど何も解っていませんが、蒲入という所は、以前、大中型巻き網漁業をやっており、大きな船を持っていたので、よその地区の人を従業員として使っていたから、他地区の人が地区内に来ることにそれ程抵抗感は無いのだ、ということを教えてもらいました。

同じ町内では、伊根漁協や新井崎漁協には、他地区から巻き網や定置網の従業員として就職し、地元に住み着いて頑張っておられる方が何人かおられるように聞いています。また、伊根漁協では1人正組合員になられた方がおられるということで、私達の励みにしたいと思っています。

漁業後継者不足ということが言われて久しくなりますが、最近では、息子が跡を継がないという以前に、漁村に子供が居ないという所も少なくないそうで、私達のように新しく漁村に住み着いて漁業を始める人がドンドン増えていくことが漁業、漁村の活性化に繋がるのだと町や府の職員の方も言っておられます。

そういったことで、私達の生活態度が周りから注目されており、地元漁業者の家庭出身者以外の人間が、地域の漁業後継者となりうるかどうか、今は試されているように思えます。

6 今後の課題と計画等

今は、定置の仕事覚えていく事でハッキリ言って精一杯です。まだまだヒョッコですので、トンチンカンなことをして漁労長に叱られたり、笑われたりしています。でも、モーターや大型の船で漁をしている人は、我々から見ると、やはり素敵に見えます。行く行くは独り立ちしてみたいものだという憧れはあります。

夫は、岸壁で釣ったり、たまに地区の方に沖に連れていってもらって釣りを楽しんでいるくらいですが、自分で沖に出るとなると船も必要ですし、組合員になることも必要になってきます。組合員になることについては、漁協の専務とも話をさせてもらっており、そのうち仲間に入れてもらえそうな雰囲気です。

組合員になったり船を持ったりするためには相当のお金が必要になりますので、共働きを続けられれば良いのですが、出産後は子育てに係らなければなりませんので、両親と同居していない私達には無理かなと思っています。ただ、子供が産まれることについて、随分ひやかされますが、皆様喜んで下さっているようで、都会の、隣人の顔も滅多に見ない、ましてや話など、という状況とは違って、うれしいものです。

先々、夫の両親と同居出来るようになった時には、母に子供を見てもらって働きたいと思っていますが、もし、妻が加工場に復帰させてもらえることになったとしても、その時は家族で支えあい、また、子供が居るという立場になった私達に対して、漁協と、一緒に働く方々に理解してもらわなければいけなくなると思えます。

言葉はきつなくても、本音は優しい情のある蒲入の皆さんの指導を受けながら1人前の漁師、地区民を目指したいと思えます。





自宅の窓から見た漁港

